経営情報研究
Vol.6. No.1

研究論文

模擬社会における個人と社会の関係について

福　田　市　朗

Relationship between individuals and their societies in simulated societies (SIMSOCs)

Ichiro FUKUDA

【要　約】　本論文は，個人と全体社会との関係を明らかにするために，まず個人と社会が論じられる視点を提示し，次に個人と社会の関係を実証的に検討するために用いた模擬社会ゲーム（SIMulated SOCiety; W. A. Gamson, 1978, 1991）のもつ利点を指摘し，最後にこのゲームにおいて実施した3つの調査を基に模擬社会における個人と社会の関係について論及している。

実施された調査は次の3つについてである。

1）人々が期待する理想社会とゲーム参加者が自ら行った模擬社会に対する評価について

2）模擬社会における各集団間の貢献度からみた関係について

3）模擬社会における各集団に対する心理的な評価について

調査結果から，人々が理想として描いた全体社会をつくることは極めて困難であること，全体社会の秩序のなさは集団間関係の調整の失敗が反映されていること，全体社会と個人は集団間の関係を通して捉えられていることが明らかにされた。このことは，個人と社会の関係は，集団を介し集団相互の関係に基づいて成立していることを示唆している。また，全体社会は各集団に対する価値付与的な役割を果し，それが個人の社会的特性になっていると思われる。

Received April 13, 1998

§1 個人と社会の関係

人々はさまざまな集団を形成し，その集団を通して相互の人間関係をはかりながら行動している。人々が集団を形成したり集団に帰属する背景には，人々が自らの欲求を満たしたいという期待や自分の利益を拡大するためという積極的な理由もあれば，生まれたときから否応なくその集団に属さざるえないということもある。我々は親を選ぶことができず，生まれ落ちる場所を選ぶことはできないし，大きくなれば学校に行かねばならない。社会に出るということは多くの場合，既存の多様な集団に所属することを意味している。人々が多様な集団に身を置くことはきわめて現実的な事柄であり，人々の行動がその集団に合わせて多彩になることも必然的といえよう。そして，その行動は現実の社会的な文脈の下で集団に持たされた価値尺度によって評価を受ける。空腹を感じた3歳の子供が店先のお菓子に手を出すことは許されても，大人がそれを行えば奇異な目で見られ非難が浴びせられる。デートの待ち合わせ時間に遅れることと授業に遅れることではその社会的な文脈が異なる。その人に与えられた集団のカテゴリーによって評価が異なってくるのである。

人々の社会的な行動が様々な評価を受ける背景には，人々は自らが属する集団のカテゴリーによって認知されていること，その特定の集団の成員として捉えられ，その集団に課されている価値尺度が働いていることが考えられる（Tajfel, 1972a, 1981, Turner, 1996a)。このような考えは，人間は自らを社会的に規定する存在者であり，全体としての社会を構成する多様な集団への所属性は人間の基本的な特性であるという思想に深く根付いている。しかも，集団への帰属性は本人によって意識されようがされまいが，人々の目はその集団のカテゴリーから人々の行動を見て評価を下すのである。すでに集団は社会の別称であり，人間はまさしく社会的存在者として定義されることになろう。我々は社会に属する存在者であり，我々の行動はその社会の文化的な制約の下に置かれることになる（Freud, 1930)。

人々は集団をなし，全体としての社会は多様な集団の上に成立している。したがって，個人と国家というような全体的社会との関係を考察するためには，人々が集団を形成する意味ないし目的，その集団が他集団とどのような関係にあるのか，さらに，それら多集団の下での人々の社会的な（集団的な）行動の特徴を明らかにする必要があろう。

集団の形成に関する最もわかりやすい説明は，それが個人に利益をもたらすからという功利主義的な見解である。集団をなすことで，我々は個人を超えた大きな力を得て，大きな利益をあげることが可能となり，危険から身を守ることもできるし，寂しさを紛らわすこともできる。このような考え方は人々が集団をなし，共に暮らしていく上での基本的な考え方であり，聖書にも説かれてきたことがらである。また，集団形成における個体間の協調行動は群淘汰における最適な戦略として生物進化論からも支持されてきた考えでもある。そして，これらの集団の持つ利点の強調は，他方では集団の成員に対する集団への忠誠心を強要し，裏切りや逸脱を厳しく咎める禁止条項として働くことになる。特に，集団間の競争においては，個人は自己を犠牲にして集団に貢献することを要求される。集団には目的があり，その目的達成のために集団は効率よく組織だてられ，成員は指導者に従い，集団に忠誠を尽くす。また，集団の価値基準を自分のものとしなければならない。このような規範的な集団の捉え方は個人の効用（utility）

に基づけられ，その範囲において集団が成立することを意味している。もし，集団に属することが何らの利益をもたらさず，また，自己犠牲のみを強いるなら，成員間の利益調整の失敗としてその集団は崩壊するであろう。宗教的な意味合いを別にすれば，集団の形成に関する功利的な説明は最も合理的で一般的な説明と思われる（Horwitz and Rabbie, 1989, Rabbie et al, 1989)。

集団を功利的な観点から捉えることは，集団を個人の利益，個人の心理的動機に照らして説明することである。そこでは個人と集団のつながりは効用性という一つの関係において論じられ，我々の全体社会の複層的な関係は透視されていない。全体社会は多様な集団の集まりであり，個人はその多彩な幾つもの集団に同時に身を置いている。幾重にも重なりあった集団が我々の全体社会を構成している。このような多集団の存在する全体社会と個人の関係こそ問題とするべきであろう。

Platon は，理想的な国家としての全体社会をきわめて機能的なシステムとして描いている。農夫が自分で鍬を作り，小麦を栽培し，パンと焼き，人々に売り歩くというように全てをなすことはきわめて効率が悪い。人々のうちには鍬を作るのが得意な者もいるし，パンを売り歩くことが好きな者もいるだろう。医者はその本分を全うし，兵士もまたその本分を全うする。その人が本来持っている能力を発揮することが正義であり，社会はそのような人々によって作られるべきだとされている。そして，国家を統治する者は，聖人として生まれその教育を受けてきた者であると唱えている。全体社会は，それを構成する様々な下位集団がその機能を果たし，調和をなすときに，理想社会として実現する。このような国家社会は決して強者によって支配されるものではなく，正義心を持つ聖者によって支配されるものであると説いている。

Platon の考え方や Rabbie らの考え方は，集団形成や集団間関係の形成，さらに全体社会の成立における基本的な特質として人間の理性と合理性を強調している。しかし，その考え方は，人間における理性的でないもの，合理的でないものを，人間を人間たらしめている理性の規範から離れているものとして，あらかじめ排除していることをうかがわせる。我々が現実に見ることができる歴史は，強者が国家を支配し，正義は強者の側にあることが幾度となく繰り返されてきた歴史である。また，個人が互いに利得を争う集団ゲームにおいては，協調行動を取るお人好しより裏切りをなす者が多くの利益を得るという現実があり，裏切りが合理的な戦略として論じられている。Platon は強者や不正をなす人々は正義の前で屈服するとその論を展開するが，それは人々の理性に訴えてこそ成立するものである。集団間ゲームにおいて，集団間の優劣を競う時に集団内の協調が問われるに過ぎない。また，今日の地球全体にまたがる環境破壊の問題解決には，人々が理性を取り戻し，倫理に目覚め，道徳心を持つことが必要だと説かれる。しかし，なぜ，人々は道徳心を発揮しえないのか。そこには自然環境に対する個人の倫理が問われ，倫理が社会に根差し，人々は社会を通して自然と向き合っていることが抜け落ちている。さらに，個人と社会の関係を直接的な関係として論ずることに弱点があるように思われる。

社会は個人の理性に基づけられて構成されるものでもなく，個人の効用に基づいて構成されるものでもない。個人と集団の関係は多様である。そしてこの多様さは個人の欲求が多様であ

ることに基づくばかりでなく，集団間の多様な関係にも由来しているのである。個人と集団をある一つの関係から捉えて，集団は個から成立しているという考え方に問題がある。確かに，個人の利益，個人の心理的な特性から集団を見ることは可能であり，集団の持つ諸特性を個人の特性に還元することも可能であろう。そして，全体社会をある目的に照らして，その目的を果たすための多彩な機能集団として論ずることも可能である。しかし，ゲシュタルト理論が主張してきたように，個（要素）の集まりを持って全体としての集団の特性を論ずることは必ずしも妥当ではない。同様に，我々の全体社会が下位集団（部分的要素）のもつ機能的な特性によって記述されるものでもない。

個人の特性はその集団において価値づけられ，全体としての集団は個を超えた特性を持つ。この事実は，個人が集団において規制され，個人の行動は集団のカテゴリーにおいて評価され，集団はさらなる集団のなかに位置づけられることを示唆している。個人はそのような複層した集団間関係に据えられているのである。ある児童の学力テストが30点であったとき，教師がその子を“駄目な生徒”とみる価値判断はその固有な関係を持つ集団において意味を持ち，それが家においても，友人関係においても意味を持つとすることは間違いといえよう。個についての価値判断は各々の集団においてなされるもので，その個の特性がいかなる集団においても通用するものではない。またその特性は集団においてすら不変なものとして特定されないのである。集団の形成を個の利益追求という功利的な面から捉えること，あるいは集団間の関係を利害関係から捉えることは，個や集団を経済的な視点で見ることに他ならず，個の特性も集団の特性もその一点で固定される。そこでは個と集団の多様な関係や多集団に属する個の多様性が失われている。個と集団の関係，あるいは多集団間の関係は多様な価値観の上に成立し，全体社会の構成はその価値尺度の一覧表を提示し，それらの位置づけをするものと見るべきであろう。

あるゲーム理論家は，自然環境における動物たちの行動について，たとえそれが協調行動であれ，攻撃行動であれ，極めて合理的に説明しうるのに，人間の行動だけはこの合理的な説明から抜け落ちると指摘している。確かに，飛べない鳥や走れない狼は厳しい自然環境のなかで生きのびることは困難である。彼らの個としての特性は自然環境との関係において成立するものだからである。また，群れをなす動物たちの協調行動や自己犠牲的な行動もその群れや種の存続という一点において説明されるからである。だが，あらゆる人間を人間としてみる人間社会にあっては，走れないことや目の見えないことのためにその人の人間的な価値が消失するものではない。それは時に裏切りを寛容し，時に強者に服従することも余儀ないことと受け入れることにも通じている。全体社会の見取図は多集団の存在を可能にする，多様な価値基準を許容する形で描かれるものであろう。

人々の行動は個人的な欲求や気分によって特徴づけられる主観的な産物といえる。たとえ，その行動が集団の目標を意識し，他者を助ける行動であってもやはり主観的であり，個人的である。しかし，いかなる行動であっても，それは社会的に評価される。このことは人々の行動が集団を介した社会的なカテゴリーで捉えられ，集団の視点から捉えられることを意味し，個人的レベルの行動ではなく，集団間のレベルで成立していることを意味している。人々の行動

は社会的な行動として理解されることが要請されているのである。

人々の行動が個人的な欲求や利益に基づいていることも食欲や性欲といった生物学的な欲求に基づいていることも確かである。人々の行動がこれらを動因として生起していると説明されるけれど，他方では，社会的な行動として評価されることも事実である。そして，後者の事柄は集団の規範や社会の持つ文化的な規範が働いている結果だとして，その規範を論ずることによって片付けられてきた。しかし，生物的な行動に文化の衣を着せたものが我々の社会的な行動であると単純に考えてはならない。なぜ集団は文化を持ち，なぜその文化が集団に強要され成員の行動の評価に働いているのか。それは単に自集団の結束を維持するために機能しているばかりではなく，集団が持つ価値観は明らかに他集団との関係，ないし全体社会との関係において機能しているからと思われる（Tajfel, 1972b)。人々の行動が多様な価値観によって判断されることは個人が関わる集団の多様性に関係する。全体社会はその多様な集団の上位に位置し，その価値観の調和をはかり，集団間に秩序を与えるようにして存在している。個人と社会の関係は様々な集団を通して成立し，個人の社会に対する考え方や態度はその社会的な文脈に応じて集団のカテゴリーを自分にあてはめることによって成立している。

Tajfel らの社会的カテゴリー理論（social categorization theory）や最小集団実験（minimal group paradigm)，さらにそこから発展した多くの理論は，人間の社会的な行動を“非ー社会的な（non-social)”行動や“前ー社会的な（pre-social)”行動から理解せんとするのではなく，“社会心理学的に（sociopsychological)”理解すること，つまり集団のレベルで理解することを強調している（Turner, 1996a, b)。それらの理論は多様な集団間の関係から全体社会の秩序形成を考察することを目的とし，集団間の複層的な関係の考察へとその理論的な拡大が目論まれている（Oakes, 1996)。

個人と社会との関係は，多様な集団間関係に置かれた個人とその多様な集団間関係を秩序づけていく全体社会との関係で考察されるべきであろう。個人は社会的な場面が異なれば，異なる価値基準を用いて行動を評価する。しかもその価値基準はより大きな上位集団において意味づけられている。全体社会は多様な集団の上に置かれるだけではない。それらの集団を文化的に支配しているといえよう。個人はそのような全体社会を個々の集団を通して垣間見ることになる。

我々は，以上のような個人と社会の複層した関係に自らの視点を定めて，個人と社会の関係を見て行かねばならない。そして，その視点にあった最も良い研究方法を手にしなければならない。我々はその一つとして Gamson の開発した模擬社会ゲームを選んだのである。次に，この模擬社会における個人と社会の関係について述べたい。

§ 2　模擬社会にみる個人と社会

人々の社会的行動は集団のレベルで考察されるべきで，個人の心理特性や個人の心理的動機に還元されてはならない。この主張は，人々の偏見や差別行動が個人的なレベルでは解決しえない事柄だと主張することでもある。同様に，環境破壊の問題が個人の倫理や道徳心に還元されることで解決はしえないことを示唆している。個人の行動をその集団で捉え，多集団のなか

で理解すること。この要請は，個人が多くの集団と関わりながら，しかも全体社会の秩序形成に関わりをもつ状況のもとで，人々の行動を捉えねばならないことを意味している。模擬社会ゲームはこの要請に最適な状況をもたらすゲームといえる。

模擬社会は一つの国家社会を模写し，そこには質を異にする多様な集団が存在する。しかし，ゲーム参加者はまず極めて漠然とした全体社会に身を置くことになる。Gamson に言わせれば，彼らにとって，最初の模擬社会は混沌としたものであり，いかなる秩序ももたない社会である。ゲーム参加者はまず特定の地域住民として自分を意識し，生活するための場所を知る。やがて生活の糧を得るために基本集団に就職し，多様な集団との関係を作り上げて行く。それらの集団への帰属は自分に利益をもたらすばかりでなく，偏見や差別をもたらすものでもある。

我々のゲームの参加者は，普通，同じ大学生であり，しかも同じ講義を受けている学生である。いわば同じカテゴリーに属する人達といえる。しかし，一度このゲームのなかで異なる地域に属するや，彼らは自地域をひいきし，他地域を悪く言い始める（清水，1992)。自・他集団の差異化には地域の特性が反映され，対立は激しさをます。“貧乏人は自分のことしか考えない”，“彼らは社会の財産を私物化している”など，と互いに相手を非難する。その背景に，社会的資産の分配と利益の配分が大きな争いの種として存在していることも確かであり，個人への中傷や集団への悪口は彼らの個人的な行動の不当さや不公平さに基づいていることも確かである。しかし，何らの生活手段を持たない“貧乏な人々”が食べることに窮々とすることに対して，なぜ“貧乏人は自分のことしか頭にない”という悪口になるのか。そこには自らが属する集団と外集団の関係が存在し，生活に困っている“個人”が忘れられているという事実が隠されている。もし生活に困っている人が自集団にいるなら，まず身近な自集団の者から助けるべきとされる。この身近さは物理的な距離ではなく集団間の関係に依存している（Oakes，1996)。

参加者のやり取りの多くは，たとえそれが個人的なものであれ，集団を媒介としたものとして捉えられ評価されている。だが，模擬社会にはそれらの評価をさらに評価する全体的な基準が存在していない。したがって，全体社会は集団間の争いのなかでますます混乱し，崩壊の危機に立たされる。

では，このような集団間の対立はどのように調整され，全体的な社会の秩序はどのようにして確立してゆくのか。そのようなとき，自集団をまとめ，他集団と交渉に当たる指導者や実力者の出現が期待される。そして，集団をまとめる指導力は個人的な能力として論じられてきた。また，集団間の取り引きにおいてその能力に優れたものが交渉に当たると考えられる。しかし，そのような人物が常に存在するとは限らないし，存在することはまれである。模擬社会のなかで最初に見い出される“指導者”は，陰の実力者，派閥の領袖，多弁な人，気前のいい人，など極めて多彩である。指導者が明瞭になる時は，その集団が抱えた問題が明らかになり，なすべきことが明瞭になった時である。そして，集団間の対立が明らかになり，集団間で生じている問題が明らかになった時である。

我々はゲームのなかで，ある学生が，全体社会の実情を捉え，社会の安定と繁栄のために各集団に何をなすべきかを説き続けたが，報われることなく，自集団からも他集団からも見放さ

れる結果に終わったことを目撃した。彼の失敗は彼の人格的特性によると説明されてはならない。個人的な問題に還元されないことが含まれているからである。問題は，彼自身がある特定の地域住民であり，また，ある特定の基本集団に属していたけれど，他の学生から見て，彼の発言や行動を評価する際にその根拠となる集団を彼において見い出すことができなかったことである。評価に必要な集団性（社会的カテゴリー）が彼になかったことが重要な要因であった。指導者になるべき人はその能力を有する人といわれる。しかし，指導者の特性と評価は集団への帰属性と集団間の関係において規定される。

個人と社会は集団を介して結びつけられている。しかし，他方では，個人と社会は直接的な関係にあると考えている。我々は絶えず社会を意識し，社会のもとで行動する。アテネの若者を扇動した罪で捉えられたソクラテスは，たとえそれが悪法であっても国家の法であるとして，それに従って死を選んだ。個人と国家は法のもとで直接的な関係を持つ。それは国家という全体社会が秩序を有し，その秩序の下に多様な集団と個人が位置づけられているからである。しかし，模擬社会にはそのような秩序が与えられていない。このことは，たとえ模擬社会が現実社会を模写しているとはいえ，ゲーム社会でしかないことを意味する。しかし，逆に，全体社会の秩序がどのようにして生ずるのか，その過程を捉え，その成立条件を探索するには好都合だといえる。

人々の社会的行動や態度はその社会性において検討すべきであり，個人と集団の関係はその集団間のレベルで検討し，さらには全体社会の成立という観点から検討しなければならない。この目的を達成するための方法的な戦略として，我々はGamsonの開発した模擬社会ゲームを取り上げてきた。理由は単純であった。模擬社会は一つの国家社会をシミュレートしており，その全体社会は多様な多くの集団から構成されているからである。しかも，これらに加えて，これまでの模擬社会の観察において，さまざまな社会心理学的な問題を確認することができたことも利点として挙げれよう。しかし，我々はまだ個人と全体社会の関係を実証的に論ずるためのデータをこの模擬社会ゲームからあまり得てはいない。データの不十分さは個人と社会の関係を捉える理論の未熟さにも原因がある。しかし，このゲームは，個人と社会の関係を論ずるための理論構築の足掛りを与えてくれるであろう。

§ 3　模擬社会における社会的関係の形成

模擬社会は我々の現実社会を模写している。このことは，模擬社会ゲームにおいて生ずる様々な問題がきわめて現実社会的であり，現実社会を考察する上で重要であることを意味している。しかし，模擬社会は一度始まると多様な要因がその強弱を異にしながら作用しあうために，できることといえば，その過程を追いかけるしかない。したがって，実験社会心理学的な変数の独立性を仮定した因果関係の追究はこのゲームにはふさわしくない。これまでの模擬社会に関する研究報告がケース研究に止まらざるを得なかった理由でもある。このゲームの開発者であるGamson自身も，このゲームが社会心理学的な研究においてどれほどの価値を持っているかについて消極的であり，社会教育上の有用性を主張するに止まっている。確かに，このゲームは社会の仕組みと人々の社会的な行動に対する学生の積極的な関心を呼び起こし，様々な場面

での社会的なスキルを身につけさせることに役立っている。しかし，人々の社会的な行動を集団のレベルで捉え，全体社会の形成という視点から理解しようとすれば，この模擬社会ゲームはきわめて有効な手段であると思われる。

ここでは，このゲームにおける個人と社会の関係を具体的に捉えるために3つの課題を設定し検討を試みた。

最初の課題は，全体社会に対する人々のイメージを2つの側面から捉え，その相違を検討することである。すなわち，人々が理想として描いた社会と自らが“主役”として演じた模擬社会を突き合わせ，その相違を明らかにすることである。人々は誰しもが理想の社会を心に描くことができよう。しかし，その理想はどのようにして描かれたのだろうか。理想社会が現実社会を基にして想像されるとすれば，現実的な諸要因のうち，何が主要な要因として働いていたのか。我々は日々の生活において全体的な社会を意識することはあまりないであろう。全体社会の有り様を意識するときはその社会が危機に直面しているときであり，社会の変革が迫られているときである。模擬社会はその全体的な社会の危機が身近に捉えられ，社会の変革はゲーム参加者の直接的な課題となる。人々の理想とする社会と現実社会がいわば個人の意識の中で直接関係するものとして据えられるという利点が模擬社会ゲームにあると考えられる。

つぎに，模擬社会の全体を構成する諸集団の複層的な関係を測定することを第2の課題とした。現実の国家社会では，個人と社会は法によって直接に関係づけられ，個人はその国の文化を共有することで全体社会の下に自らを置いている。しかし，模擬社会にはそのような法律も文化も存在してはいない。ゲーム参加者は集団を作り，集団間の関係を成立させながら，全体社会を作ることになる。全体社会の創造は個人と集団を統制し，各々に対して一定の価値基準を付与していく機能の形成過程とみなせる。

模擬社会ゲームでは，まず多様な集団が形成され，各集団は自らの特殊性と意義を主張しあう。次にそれらの集団間に対立や抗争が生ずる。対立や抗争は利益の争いであるとともに価値観の抗争であり，この抗争の中から全体社会の構想が生まれ，集団の個性や価値観はさらに強化されることになる。したがって，集団間の関係の捉え方や全体社会の捉え方を知ることは全体社会の形成過程を知るために重要となる。ここでは集団間の関係を相互の繁栄と安定に寄与する貢献度という視点から測定する。

最後に，以上のような集団間の関係の評価において，参加者であるプレーヤーが各集団をどのように認識し，どのような態度を持っていたかについて調べる。各集団に対する認識や態度の特性から彼らの関係評価における内容の検討を行うことを第3の課題とした。

第1課題

目的　個人と全体社会との関係に注目し，人々が一般に全体社会に対して何を期待しているか，またいかなる期待に基づいて実際の模擬社会を作り出そうとしているのか。そして，自らが作り出した全体社会をどのように評価しているのかについて検討する。つまり，前者では，人々が“より良い社会”に求めるものを明らかにし，後者では，自らが作り出した模擬社会を評価する際に重要としたものを明らかにすることが目的である。

方法　1996年の秋に実施した２つのゲーム（参加者105名：Ｓ大，２回生）を調査の対象とした。調査は目的に従い，１回目の調査をゲームを行う１ヵ月前に，２回目の調査をゲーム終了後に行った。質問紙はいずれも同じ内容の15個の項目から構成されている。１回目は，“より良い社会”について各項目ごとにその重要性を５段階尺度で評定，２回目は，自分の模擬社会について各項目ごとに５段階尺度で評定する。例えば，『民主的であること』はより良い社会であるためにどれほど重要かについて，“非常に重要(5)”から“全く重要でない(1)”までの５段階で評定する（１回目の調査）。２回目の調査では，自分たちの模擬社会は『民主的であったか』について，“非常に民主的であった(5)”から“全く民主的ではなかった(1)”までの５段階で評定する。有効回答者数は１回目93名，２回目103名であった。

結果　２回の調査資料をもとに主成分分析を行った結果を表１と表２に示す。人々が抱く“よりよい社会”とは，互いに協調しあい連帯感が持てる社会であり，物事は民主的に公正に行われること，そして親しく自由につきあうことができ，互いに信頼できる社会とされた。だが，プレーヤーたちが彼らの実際の模擬社会を評価する際には，連帯感があり，楽しく，身近な社会であったか，人々は公正で正当な活動を行ったか，そして自由で平和な社会であったかに注意を払っていたと考えられる。２つの主成分分析から，第１因子は情緒的な側面を，第２因子は合理的な側面を，第３因子は公共的な側面を示唆していると思われるが，そこに含まれる項目は必ずしも同じではない。

次に，15個の項目のそれぞれに示された平均評定値から，１回目の調査では，より良い社会に求められる重要な項目として上から順に，“平和であること”，“信頼できること”，“安心できること”，“秩序があること”，“公正であること”が挙げられる（いずれも５段階評定値で4.3以上）。しかし，これらの項目は実際の模擬社会の評価においていずれも低下している。そ

表１　より良い社会の判断特性（N＝93，60.9％）

	第１因子 32.7％	第２因子 11.9％	第３因子 10.3％	第４因子 6.9％
主項目	協調，開放 連帯	民主，公正	身近さ 自由	信頼
固有値	4.901	1.660	1.543	1.035

表２　模擬社会の判断特性（N＝103，60.2％）

	第１因子 39.5％	第２因子 11.2％	第３因子 9.5％
主項目	連帯，楽しさ 身近さ	正当，公正	自由，平和
固有値	5.920	1.684	1.425

表3　低下した項目群

1回目：より良い社会	2回目：模擬社会
秩序があること（4.441）	秩序があったか（3.083）
正当であること（4.398）	正当であったか（3.156）
公正であること（4.367）	公正であったか（3.202）
信頼できること（4.516）	信頼できたか（3.486）

（P＜0.001，df＝200，t検定）

のうち最も低下した項目を表3に示す。これらの結果は，参加者が自分たちの社会を築く際に，全体としての社会秩序を作り出すことの困難さ，参加者が互いに公正で正当なつきあいをすることの困難さを示唆している。

現実社会と理想社会との間には大きなズレがあることは日々知らされる事実である。しかし，全体社会は最も上位に置かれる構成体であり，地域や基本集団を構成する仕方とは異なり，それに対する期待も異なっている。模擬社会におけるプレーヤーの葛藤もその多様な集団の位置づけの困難さにあると思われる。全体社会に期待するものが，その情緒的な側面であり，必ずしも合理的な側面ではないという事実は，ウェバー（Weber，M.）が指摘する全体社会の形成における合理性の役割だけでは不十分であることを示唆している。

第2課題

目的　1回の模擬社会ゲームの参加者は約40名であり，参加者は4つの地域に配属され，その地域が彼らの最初の生活の場となる。地域には社会システムの核となる7つの基本集団が用意されているが，それらは特定の地域に片寄っており，しかも代表者はすでに定められている。代表者に選ばれなかった他の参加者は，これらの代表者と話し合い，自分の目標と照らしつつ，特定の基本集団に就職する。模擬社会を集団カテゴリーから捉えると，地域・基本集団・全体社会という3つの水準が異なる集団からなる複層的な構図として描くことができる。参加者は地域の住民，基本集団の構成員，全体社会の国民というカテゴリーに属することになる。第2課題は，ゲーム参加者が個々の集団や集団間の関係をどのように捉えているかを調べることである。つまり，個人・地域・基本集団・全体社会という4つの単位で構成されている模擬社会をその4者間の関係図として描くことを目的とした。そして，4者間の関係は，各々が互いに相手方の繁栄と安定にどれだけ貢献しえたかという貢献度の評定値として求められた。

また，模擬社会は多様な集団の形成，集団間の抗争を経て，全体社会の危機をむかえる。参加者の危機意識から集団間の妥協が生まれ，社会は安定し，繁栄期に入る。ただし激しい抗争から社会が崩壊することもある。このような模擬社会の展開を予想し，集団間の関係の測定は集団が形成され，抗争が起きている段階（ゲームの途中）と全体社会が安定した段階（ゲームの終了後）の2度において調査を実施した。

方法　調査の対象としたゲームは1995年秋から1996年の春にかけて3つの大学で行われた5

つのゲームである。いずれも6から8セッションまで続けられた。調査は2回実施され，1回目は地域間の交流が活発となった第3セッションの終了後，2回目の調査はゲームが終了した時に実施された。有効回答者数は182名（緑地域47名，黄地域47名，青地域43名，赤地域45名）。

結果　5つのゲームは各々個性豊かな展開を示したが，すべての住民による貢献度の平均評価値で4者間の関係をもとめた（図1）。すなわち，4つの地域の住民と2回の調査をすべて込みにした平均値が示されている。2回の調査を込みにした理由はゲームが進むに連れて4者

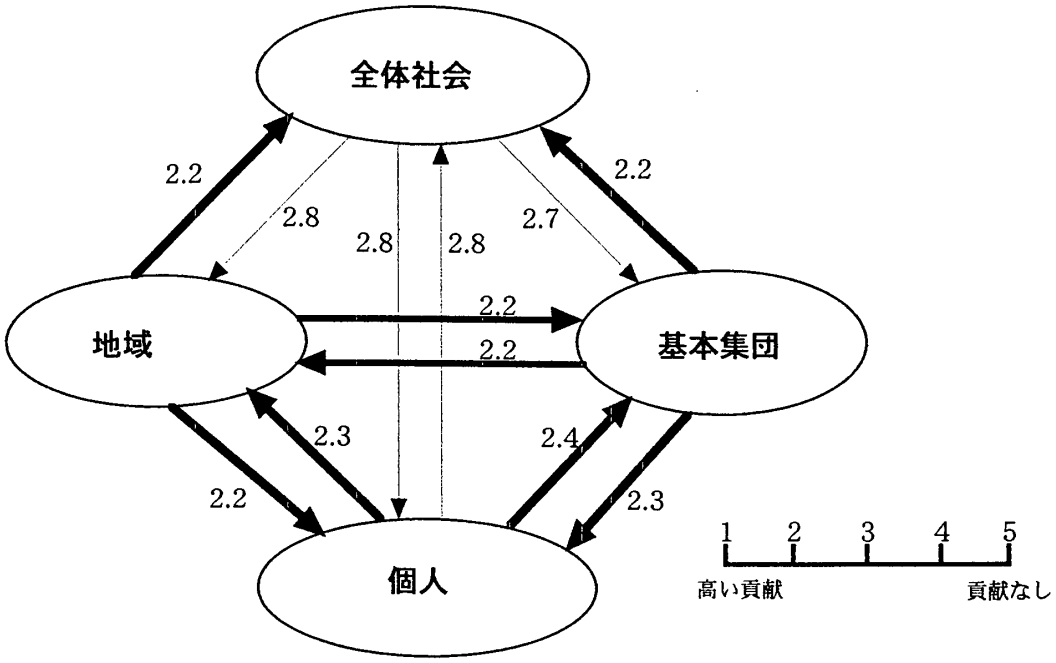

図1　4者間の相互貢献度の評定（1996年第60回大会より）

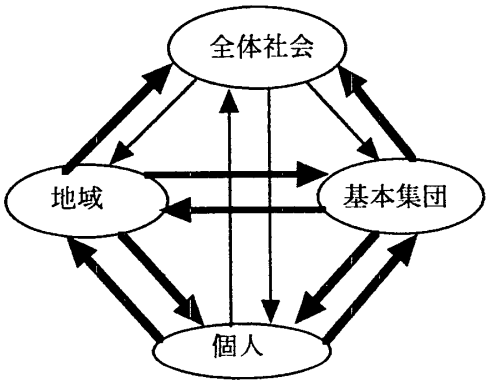

図2-1　豊かな地域（緑）の住民の評価した相互の貢献度
（線分の太さは関係の強さを示す）

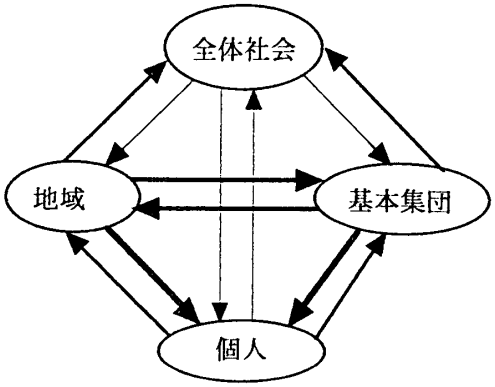

図2-2　剝奪された地域（赤）の住民の評価した相互の貢献度

間の関係が一様に強められたからである。なお，図中の数値で，1が最も貢献したこと，5は全く貢献しなかったことを表わし，3はどちらとも言い難いことを示している。矢印は貢献した相手方をさしている。次に，各地域ごとに4者間の関係を取り上げた。そこでは各地域による貢献度の評価に違いが見られた。図2-1，2-2の各々は，社会的資源が豊かな地域（緑）とあらゆるものが剝奪された地域（赤）における4者間の貢献度を線分の太さで示したものである。緑地域における個人・地域・基本集団の3者間の相互の貢献度は，1回目，2回目の調査を通して高く評価されているが，全体社会と地域，基本集団との関係は，その線分の太さが異なることから，全体社会からの見返りはあまりないと評価していることが分かる。赤地域では相互の貢献度はかなり低く評価されている。しかし，ゲームが進むに連れて，個人と地域，基本集団との関係は強まっていることが分かる。

ゲームが展開するに連れて，4者間に見られる貢献度は全体に肯定的な方向に移行している。基本集団と地域の関係は対称的で，緊密な関係にあり，セッションが進むにつれてますます深まっている。個人は地域や基本集団と結び付き，相互に対等な関係を求めている。しかし，個人と全体社会の関係は希薄なままである。また，地域や基本集団の全体社会との関係は非対称的であり，地域や基本集団の全体社会に対する貢献度に比べて全体社会は利を得けるだけで，地域や基本集団への貢献は少ないと評価している。このことは社会資源を有する豊かな地域において顕著である。

集団の形成はまず地域においてなされる。そのとき，その地域に基本集団があればそれが核となり，地域の結束は促進される。したがって，基本集団を持たない地域は地域における結束力が小さかったと思われる。地域の結束が基本集団を媒介にして強められていくこと，それが地域一体型の集団主義へと発展していることは日本人学生の特徴といえる。また，個人は地域や基本集団を直接的な利害関係者と捉えているが，全体社会は利害関係の外におかれているように思われる。

第3課題

模擬社会の形成過程における個人・地域・基本集団・全体社会の4者間の相互関係を，“（他者）の繁栄と安定にどれほど貢献したか”という貢献度の評定に基づいて捉えた。その結果から，社会的資源を持つ3つの地域（緑，黄，青）では，個人・地域・基本集団の3者は互いに等しく貢献していたと評価し，セッションが進むに連れて，3者の結束はさらに強められるという傾向が見られた。また，社会的資源が剝奪されている赤地域では4者間の相互貢献度は極めて低いと評価されていることが分かった。社会的資源を何も持たないために他者への働きかけができなかったと捉えている。他方，個人・地域・基本集団の3者の各々に対する全体社会の相互貢献度の評価は低く，アンバランスな非対称的な関係が認められた。特に，地域や基本集団は全体社会の繁栄と安定に大きな貢献をしたと評価するが，全体社会は地域や基本集団の繁栄や安定に何ら貢献的ではなかったと評価していた。

目的　ここでは，以上の結果を踏まえ，個人・地域・基本集団・全体社会の4者間に認められた相互貢献度における評価の対称性・非対称性の内容分析を行う。個人・地域・基本集団・

全体社会の4者の相互の貢献度の相違や相互関係の対称性・非対称性は利害関係の捉え方に依存していると考えられる。個人は自地域の基本集団に就職し生計の糧を確保する。そこでは，個人・基本集団・地域の3者間に明確な利害関係が生じ，その利害調整が相互の貢献度の評価に反映されていたと思われる。あらゆる生活手段が剝奪された赤地域では収入の手段も生計の手段も他地域に依存し，地域内での利害調整は豊かな地域への組織的な抵抗や妥協という手段以外にはない。他方，全体社会は直接的な利害関係の対象者として捉え難い。しかも，参加者が描いている全体としての社会“像”は，彼らが属する地域や基本集団の特殊性によって異なると思われる。したがって，模擬社会住民の全体社会に対する非対称的な関係を明らかにするために，個人・地域・基本集団・全体社会に対する参加者の態度特性を抽出し，その内容を分析することが重要である。

方法　1995年秋－1996年春において3つの大学で行った5つのゲームの参加者を調査の対象とし，ゲーム中2回の質問調査を実施した。1回目はゲームの途中であり，2回目はゲーム終了時に行われた。質問項目は個人・地域・基本集団・全体社会の活動や印象に関する24対の形容詞からなる。個々の評定は5段階評定。有効回答者数は182名。

結果　個人・地域・基本集団・全体社会の4者の活動評価，印象の判定を行うために用意された24対の形容詞について主因子分析を行った。表4は，2回の調査を込みにし，さらに4者のすべてを含めた全体のデータから抽出された主要な3因子である。第1因子は正当性・信頼性，第2因子は積極性・活動性，第3因子は公共性・友好性によって特色づけられている。しかし，4者の各々について行った主因子分析の結果から，4者間で必ずしも因子特性は一致しないことが分かった（表5-1，5-2，5-3，5-4）。個人の活動評価では積極性・活動性が，地域の活動評価では正当性・公正性が，基本集団の活動評価では公正性・民主性が，全体社会の活動評価では信頼性・友好性が第1因子として重視されていることが認められる。

人々の社会に対する態度は，自分が関わる各々の集団との関係によって特徴づけられる。身近な地域集団では，正当で公正的な活動が評価の基準となり，その活動が民主的であり，連帯感が生まれているか否かが問われている。また，生計を得るために就職した基本集団の活動は，公正で民主的であるか，さらに，その活動が自信にあふれ積極的であるかが問題とされる。全体的な社会は，信頼できる友好な社会であるかが問われていた。そして，このような集団に対する個人の活動は，積極的な社会への参加の有無によって評価されていたと考えられる。

個人・地域・基本集団・全体社会の4者間における相互貢献度評価に見い出された対称性・非対称的な関係は，各集団に対する個人的な態度の相違を反映しているが，集団間の関係の有

表4　4者〈個人・地域・基本集団・全体社会〉の総合評価に見る主因子分析（3因子による寄与率　49%）

	第1因子（37.5%）	第2因子（9.2%）	第3因子（2.3%）
主項目	正当性・信頼性	積極性・活動性	公共性・友好性
固有値	8.993	2.212	.548

表 5-1　個人の活動評価に見る主因子分析
（5 因子による寄与率 55.1%，後半のみ）

	第 1 因子 (39.0%)	第 2 因子 (12.0%)	第 3 因子 (4.0%)	第 4 因子 (2.7%)	・・ (略)
主項目	積極性 活動性	正当性 公正性	健全性 友好性	楽観性	—
固有値	8.168	2.874	.964	.657	—

表 5-2　地域の活動評価に見る主因子分析
（4 因子による寄与率 57.6%，後半のみ）

	第 1 因子 (42.1%)	第 2 因子 (10.2%)	第 3 因子 (2.6%)	第 4 因子 (2.4%)
主項目	正当性 公正性	積極性 活動性	楽観性	連帯性
固有値	10.094	2.454	.689	.587

表 5-3　基本集団の活動評価に見る主因子分析
（4 因子による寄与率 59.1%，後半のみ）

	第 1 因子 (41.5%)	第 2 因子 (11.8%)	第 3 因子 (3.3%)	第 4 因子 (2.6%)
主項目	公正性 民主性	積極性 自信	楽観性 楽しさ	革新性
固有値	9.957	2.825	.790	.617

表 5-4　全体社会の活動評価に見る主因子分析
（5 因子による寄与率 52.8%，後半のみ）

	第 1 因子 (37.0%)	第 2 因子 (7.3%)	第 3 因子 (3.3%)	第 4 因子 (2.5%)	・・ (略)
主項目	信頼性 友好性	楽観性 親近性	活動性 積極性	利己性 個人性	—
固有値	8.876	1.748	.896	.595	—

り様や全体社会との関係の相違もまた反映している。対称的な関係をもつ個人や地域，基本集団の評価では，正当性や公正性が判断の基準として，非対称的な関係をもつ全体社会の評価では，信頼性や友好性が判断の基準として機能している。このような評価基準の相違は，個人・地域・基本集団・全体社会の相互の位置関係が異なることを示唆し，全体社会の位置づけは個人的視点からではなく，集団に身をおいて社会を見ているためといえる。特に，日本人学生の模擬社会を見る限り，個人と全体社会とのつながりがきわめて弱く，地域や基本集団を通して全体社会を捉えていること，そして，全体社会は地域や基本集団を評価する基準と異なる基準で評価されていることが指摘される。

全体社会と個人は直接的な関係にはない。個人はその集団を通して社会と関係している。そして，個々の集団と全体社会に対する人々の態度は異なっている。3つの調査から指摘されたこのような特徴は，模擬社会ゲームに特徴的なものなのか，それとも現実の我々の社会の特徴の写しなのか。それらを明らかにするにはまだ多くの研究が必要である。ただ，集団間の関係を介在させない限り，個人と全体社会の関係を十分に論ずることはできない。このことは確かである。

§4　終わりに

混沌とした状況の下でも，人々は漠然とした社会についての意識を持ちうる。Gamson が「SIMSOC 進行係マニュアル」でも述べているように，ゲーム参加者は模擬社会で行動する際，自分の国の文化的規範を当てはめながら模擬社会を考えるからである。参加者は，様々な社会的行動を行いながら，彼らの模擬社会が次第に全体としての構造を持ち，全体として機能するものと理解するようになる。彼らは模擬社会のなかで自分を捉え，人々の行動を社会的に評価する。模擬社会の展開を観察することによって，こうした一連の流れが，個人的なレベルではなく，集団のレベルで生じていることを読み取ることができる。人々が目に見える相手として捉えることができるものは，他者の存在と行動であり，集団そのものは直接目にすることはできない。しかし，他者の行動も自分の行動もその集団を抜きにしては評価することはできない。全体社会はそのような集団が幾重にも重なった複層的な構造を持っている。人々の社会的行動の評価にかかわる価値的な多様さは集団間の多様な関係に起因している。全体社会の創造はこの価値の多様さに普遍性を与えんとする試みであり，ある一定の文化的規範を与えんとする社会的要請と考えられる。人々の価値観は自分が属する自集団において成立するが，全体社会においてその妥当性が試される。人々の価値観の変化は自集団に縛られるものではなく，全体社会の変化に対応する。こうした事実を明らかにすることが模擬社会ゲームに課された研究課題といえる。

全体社会の形成と変革の過程を具現する模擬社会の展開を追って見よう。人々はまず互いに集団を作り，相互に集団間の相違を主張しあう。それは集団間の対立を生み，時には特定集団が消失することもある。また，集団の合併によって，より大きな集団へと発展することもある。特殊な形態の全体社会を除く限り全体社会には多様な集団が属している。模擬社会における全体社会もまた多様な集団に統一性を与える形で展開しているといえよう。

これまでの模擬社会の観察から，全体社会の形成には3つの段階があると思われる。ただし，出現した全体社会は各々が個性豊かでどれ一つとして同じものとはならない。しかし，我々が行ったゲームの参加者はほとんどが日本人学生であり，日本に特有な特徴をそこに見い出すことはできる。

模擬社会における全体社会の形成の最初の段階は，集団形成の段階である。混沌とした状況の下で互いに話し合いながら個人的な人間関係を結び，地域的な集団をつくる。あるいは地域にある基本集団を核にして目的集団を形成する。こうした様々な集団の形成期が第1段階である。第2段階は集団間の関係の形成段階といえる。日本では，地域の基本集団は地域に属するものとして地域的集団に組み込まれることが多い。基本集団の代表者は地域の代表者でもあり，地域の代表者は基本集団に対する発言力を持っている。しかし，多くの場合，個人より集団の合意が優先され，集団の意思決定が大きな影響力を持つ。アメリカにおけるゲームでは，基本集団と地域は互いに区別される集団であり，代表者の個人的力量が重視されている。この相違はその後の模擬社会の展開に大きな違いをもたらしていると考えられる。日本では集団間の対立は主に地域間の抗争として，アメリカでは基本集団間の覇権争いに地域の抵抗集団が加わるという二重の抗争が生ずると報告されている（Gamson, 1991, "Coordinator's Manual", Fukuda and Yamamoto, 1996)。このような集団間の抗争によって全体社会は崩壊の危機に立たされる。第3段階は人々が社会の危機を意識し，全体社会の安定をはかるために集団間の調整を行い，互いに協力しあう段階といえる。そして，各集団が全体社会の維持のために役割的な行動を遂行するようになると社会は安定し繁栄する。ただし，集団間の調整に失敗し相互の妥協点が見い出せない時，社会は崩壊する。第3段階で，全体社会の安定が達成されることに日本とアメリカに違いはないが，集団間の勢力の安定化と維持については違いがあるように思われる。日本ではあくまで地域という集団が主導権を握っている。しかし，この第3段階における主導権の執行には，集団間の問題だけでなく，全体社会に対する態度が問われ，全体社会の秩序を意識した主導権の行使が問われることになる。

地域や基本集団と個人の関係は，自分の生活の安定をはかり，より豊かにする，さらに他集団からの攻撃から身を護るためという個人的な関心から結ばれている。このような利害に基づく関係は人々の行動に対して公平さや正当性を要求する。しかし，全体社会は利害関係の外に位置し，個人は全体社会の視点から集団の行動を規制し，他集団の行動の評価を行う。たとえば，生活手段を剝奪された人々は社会的資源を豊富に持つ人々に対して，"彼らは社会を無視し自分勝手である"，と批判するが，その批判の背景には，個人の生活権確保とともに全体社会についての意識があり，その価値観が働いていることを意味している。

我々が模擬社会を通して得たことはある意味でまったく常識的であったといえる。しかし，我々は個人と社会を論ずる際に，全体社会を構成する多様な集団の位置づけを曖昧なままに論じていた。それは集団を個人の利益追求や個人的な心理特性に還元し，集団それ自身が持つ意味を個人に解消したことにも由来している。また，集団間の関係を当事者間の問題として論じてきたためであろう。そのような問題を克服するためには，個と集団の関係を多様な集団間関係へとその問題点を広げ，多集団を含む力動的な全体性を考慮したゲシュタルト的な立場で捉

え直すことが必要である。集団の特性は個に還元される以上に集団間とその集団を含むより大きな集団の特性によって影響を受けるものだからである。さらに，集団の特性は決して静的ではなく，動的であり，現実の社会的な文脈によっても変化を被る。これらを問うことはゲシュタルト理論にとって極めて重要な課題であり，こうした考察を通して，ゲシュタルト理論も新しい展開を迎えるものと思われる（Murray, 1995)。

謝辞：本論文に引用した２つの課題は，甲南女子大学の清水徇と山本雅代の両名とともに進められてきた共同研究であり，日本心理学会第60回大会，第61回大会で発表されたものの一部である。本論文への引用を快諾していただいたことに感謝の意を表わしたい。

参考文献

Abrams, D. (1996) Social identity, self as structure and self as process. In W. P. Robinson (Ed.), *Social groups and identities: developing the legacy of Henri Tajfel*. Oxford: Butterworth-Heineman.

Freud, S. (1930) Das Unbehagen des Kulture.「文化への不満」，*フロイト著作集*，1969，第３巻，431-496，高橋義孝ら訳，人文書院.

Fukuda, I. and Yamamoto, M. (1997) A comparative study on the development of SIMSOCs in Japan and in USA. *Presented in the 2nd Conference of the Asian Association of Social Psychology, Abstracts*, 256.

福田市朗，清水徇（1996）模擬社会における秩序形成における社会的関係の変化(1)，社会的意識の非対称性について．*第60回日本心理学会大会*，抄録集，131.

福田市朗，山本雅代（1997）模擬社会における秩序形成における社会的関係の変化(2)，（非）対称的な関係の内容について．*第61回日本心理学会大会*，抄録集，137.

Gamson, W. A. (1991) *SIMSOC; Coordinator's Manual*, 4th ed., The Free Press.「SIMSOC 進行係用マニュアル，Ⅰ，Ⅱ」，清水ら共訳，1985，立命館文学，478-480号.

Gamson, W. A. (1991) *SIMSOC; Participant's Manual*, 4th ed., The Free Press.「SIMSOC 参加者用マニュアル」，清水ら共訳，1985，立命館文学，483-484号.「模擬社会：参加者マニュアル」，簡略版，1994，清水徇，福田市朗（共著），摂南大学.

Horwitz, M. and Rabbie, J. M. (1989) Stereotypes of groups, group members, and individuals in categories: A differential analysis. In D. Bar-Tal, C. F. Grauman, A. W. Kruglanski, and W. Stroebe (Eds.), *Stereotyping and Prejudice: Changing Conceptions*. New York: Springer Verlag.

Moscovici, S. (1972) Society and theory in social psychology. In J. Israel and H. Tajfel (Eds.), *The context of social psychology: A critical assessment*. London: Academic Press.

Murray, D. J. (1995) *Gestalt psychology and the cognitive revolution*. New York: Harvester Wheatsheaf.

Oakes, P. J. (1996) The categorization process: Cognition and the group in social psychology of stereotyping. In W. P. Robinson (Ed.), *Social groups and identities: developing the legacy of Hen-*

ri Tajfel. Oxford: Butterworth-Heineman.

プラトン「*国家*」，上下，藤沢令夫訳，1995，岩波文庫．

Rabbie, J. M., Schot, J. C., and Visser, L. (1989) Social identity theory: A conceptual and empirical critique from the perspective of a behavioural interaction model. *European Journal of social psychology*, 19, 171-202.

清水徇 (1995) 模擬社会における自集団びいき．*甲南女子大学人間科学年報*，20，3-14．

Tajfel, H. (1972a) La catégorisation sociale. In S. Moscovici (Ed.), *Introduction à la psychologie sociale*, Vol. 1. Paris: Librarie Larousse.

Tajfel, H. (1972b) Experiments in a vacuum. In J. Israel and H. Tajfel (Ed.), *The context of social psychology: A critical assessment*. London: Academic Press.

Tajfel, H. (1989) *Human groups and social categories*. Cambridge: Cambridge University Press.

Turner, J. C. (1996a) Henri Tajfel: An introdution. In W. P. Robinson (Ed.), *Social groups and identities: developing the legacy of Henri Tajfel*. Oxford: Butterworth-Heineman.

Turner, J. C. and Bourhis R. Y. (1996b) Social identity, interdependence and the social group: A reply to Rabbie et al. In W. P. Robinson (Ed.), *Social groups and identities: developing the legacy of Henri Tajfel*. Oxford: Butterworth-Heineman.